

II 1999年度総合人間科の取り組みと公開授業の実践報告

中学1年生

生き方を探る 一人との豊かな学び合いから考えよう

石川久美・藤田高弘
米田潤一・大口悦子

【抄録】 中学1年生では、保護者などの身近な人や興味・関心のある人へのインタビューを行った。インタビュー内容の発表や、そこで気づいた問題点に関する討論会を通して、生き方を探る基盤づくりを行った。

【キーワード】 生き方 人から学ぶ フィールドワーク 発表・討論会

I. 学年テーマについて

各種メディアの発達や学校外での活動場所の多様化によって、生徒たちは多くの情報を得ることができるようになった。しかし、一方で、家庭、学校、地域などで身近な人からじっくりと生き方を学ぶ機会が減っている面もある。

中学1年生では、新たに会ったクラスのメンバーやその保護者とのかかわりを手がりとして、人との豊かな学び合いの場をつくることを目指した。また、校外に出て、自らが選んだ興味・関心のある人から生き方を学び、学んだ内容を発表することで、友人との学び合いの場をつくり、さらに、そこで気づいた問題に関して討論するなかで、多くの考えを学んだり、人から学ぶ楽しさを知り、それを足場として生き方を探る基盤づくりを行うことを目標とした。

中学1年生で、「人との豊かな学び合い」の足場づくりをして「生き方を探る」基盤をつくり、6年間の本校での生活の中で、「自分の人生を自覚的に選択していく力を育てる」という総合人間科の最終目標へとつなげていくことを願っている。

II. 1年間の活動内容

4月17日	総合人間科の紹介	
4月15日	友人へのインタビューとその友人の紹介	
5月29日	保護者などの身近な人を訪れるフィールドワークの交渉を始める	
6月5日	フィールドワーク依頼書、質問状の作成と送付	2月10日
6月19日	身近な人へのインタビューのフィールドワーク	
6月24日	フィールドワークのまとめ	
		7月17日
		夏休み
		9月4日
		9月18日
		10月2日
		10月16日
		10月30日
		11月6日
		11月11日
		11月20日
		12月4日、18日
		1月27日
		1月29日
		フィールドワークの発表
		親戚などにインタビュー
		2学期活動内容ガイダンス
		興味・関心のある人へのインタビュー計画
		フィールドワーク先を探す
		フィールドワーク先との交渉
		フィールドワーク先へ依頼状と質問状の送付
		フィールドワーク下調べ
		午後フィールドワーク（L、Tと生活の時間を利用）
		お礼状発送
		フィールドワークのまとめと発表計画
		発表・討論会準備
		1-a発表：「人と生き物の関わり合いを探る in 東山&名古屋港」
		討論会：「動物たちを動物園やショーなどで見世物にすることについてどう考えるか」
		1-c発表：「現在の動植物」
		討論会：「生活が苦しくなった時、飼っていたペットをどうするか」
		2月5日
		1-b発表：「スポーツの世界」
		討論会：「スポーツの必要性」
		2-a発表：「医療・障害者」
		討論会：「薬品の研究と動物実験」
		2月10日
		2-b発表：「お客さんが喜んでくれるために」
		討論会：「買い物の仕方」
		3-a発表：「テレビ放送の裏にある人々の努力」

- 2月19日 討論会：「ニュースの必要性和問題点」
3-b発表：「JAPAN SELF DEFENSE FORCES」
討論会：「自衛隊の必要性和問題点」
4-b発表：「宇宙・考古学・歴史」
討論会：「宇宙に自給・自足で住めるのか」
- 2月22日 3-c発表：「法に携わる人々」
討論会：「少年法は必要か」
4-a発表：「人の考え方と接し方」
討論会：「早くからの学習と習い事の是非」
- 3月4日 集録原稿作成
小論文「総合人間科を通して考えたこと」

Ⅲ. 生徒の取り組みの様子

(1) 友人へのインタビュー

“人との豊かな学び合い”の一步目として、まずは、初めて知り合った同学年の友達にインタビューをして、他の友達に紹介をした。

本年度の中学1年生は、小学校時代に、クラス役員や生徒会役員をしたり、学芸会で役者や指揮者の経験があるなど人前で発表することに慣れている生徒が多く、最初の自己紹介もとてもスムーズでしっかり発表していた。そのため、友人へのインタビューでも、楽しそうに取り組み、インタビューした友人の紹介をすると一言一言に反応して盛り上がった。

まだ、浅い質問であったり、聞いた内容を羅列するにとどまっている場合もあったが、将来なりたい職業などのように生き方に関わる質問もあった。その質問に対してアナウンサー、考古学者、幼稚園の先生など具体的な職業を臆せずに答える生徒が多かった。

(2) 身近な人へのインタビュー

友人へのインタビューでの経験を生かして、まずは保護者などの身近な人へのインタビューを行った。2人か3人を1つのグループとして、自分の保護者以外にもインタビューができるように2人以上の方にインタビューを行った。総合人間科のある土曜日の午後を利用して校外へ出かけた。

質問事項の中に、“生き方”に関わる質問を入れるようにアドバイスをを行った。

身近な人へのインタビューは、ほとんどの生徒にとって、校外でのフィールドワークの計画・設定・実行をする初めての機会となった。

自分の親との違いに驚いたり、友人が自分の親にインタビューするのを聞いて、自分の親を再発見することにもなった。

例えばK.Eさんは、「私は、自分の“母”なのに“先生”になることを、“楽しみ”だけでなく、“他人”と“自分”のことをちゃんと考えていて、私には、“母”に“後光”がさしているように見えました。」と書き、母のまわりに後光がさしているイラストを書いた。

また、保護者からの、「生き方にかかわる質問をされて、改めて考えるよい機会になった。」という感想もあった。友人の親や祖父母がほとんどであったため、交渉はスムーズであったが、インタビューに慣れていないために深い質問ができなかったり、質問の答えに対して改めて質問することができない生徒も多かった。しかし、積極的に取り組むことができ、次の活動に生かしていくことができた。

(3) 興味・関心のある人へのインタビュー

興味・関心のある人へのインタビューでは、東山動物園の飼育係、放送局のプロデューサー、スポーツ選手、警察官、弁護士など、自分から進んで交渉していく生徒が多かった。例えば、東山動物園へ行った生徒は、ヘビを首にまいてもらって撮った写真を嬉しそうに見せにきてくれたが、そういった様子から充実したフィールドワークであったことがうかがえる。フィールドワークの報告書も保護者へのインタビューの時の報告書に比べて、内容が充実したものとなった。

交渉の電話、依頼状、質問状など初めての生徒も多く、とても時間がかかった。特に手紙は書きなれていない生徒がほとんどで、語句の使い方、漢字、宛名の書き方など間違いが多く、何度も書き直していた。しかし、一生懸命取り組んでいる姿勢が先方にも伝わり、漢方薬に興味をもってフィールドワークにでかけたBさんとHのお礼状に対して、フィールドワーク先からお礼状が届いた。

「今回訪問されました生徒さんたちは、とても意識が高く、前もって準備も十分できていて、大変感心させられました。自分自身、そんな時代にどうだったかということ、漢方とか、東洋医学とか、頭のかたすみにもなかった訳で、今の若いの方が、そういったものに、少しでも興味をもってもらっていることが、とてもうれしかったです。(中略)これからも、このような企画がありましたら、お気軽にご連絡ください。」

あるいは、愛知警察本部でのフィールドワークでは生徒がインタビューしている写真の載った署内の官報を送っていただくなど、フィールドワークに対して、暖かく対応してもらえた生徒が多かった。



愛知警察本部にてフィールドワーク

「行く前は“やっぱり誰か友達と行けばよかった”と思ったけど、行ってみると、やっぱり一人でもここに来て良かったと思えて、とてもHAPPYな気分になったのが印象的。和菓子に関する知識もかなり増えて、和菓子を食べるときにそれを思い出したら前よりおいしくたべれたから行ってよかったなあと思うことができた。とても充実したフィールドワークだった。」
(S.Eさん)

このS.Eさんのように、友達について行くのではなく、自分の興味・関心を土台としてフィールドワークへ行った生徒ほど、充実したインタビューを行うことができた。

(4) フィールドワークのまとめレポート

昨年度までは、フィールドワークの報告書のみで、個人でレポートのかたちにはまとめなかった。しかし、今年度は発表会と討論会を3学期としたため、報告書だけでは冬休みの間に印象が薄れてしまうと判断して、レポートを作成することにした。授業時間があまりとれなかったために、枚数などの指定はしないで、各々がまとめられる範囲でまとめた。十分なレポートの指導まではできなかったが、絵や写真をうまく使ってわかりやすくまとめることができる生徒が多かった。

(5) 発表・討論会準備・公開授業

昨年度までは、“身近な人へのインタビュー”の前に、“先輩へのインタビュー”を行っていたために、3学期に討論会をもつゆとりはなかった。今年度は、フィールドワークのまとめレポートを加えたものの、フィールドワークの発表を内容の近いグループごとにまとまって行うことにより、時間を短縮して、討論会をもつ時間をつくった。フィールドワークでインタビューした内容を友人に伝えるのみでなく、そこで、気づいた問題意識を育て、同級生と意見交換すること

が学び合いの場をつくり、より深く“生き方を学ぶ”ことにつながると考えたからである。討論テーマは全員が1つずつ考え、それをグループ内を出し合い、相談して決めた。

ここでは、10個のグループの中のいくつかを取り上げてみる。

① 1-a グループ

発表：「人と生き物の関わり合いを探る in 東山 & 名古屋港」

討論会：「動物たちを動物園やショーなどで見世物にすることについてどう考えるか」

名古屋港水族館を訪れたグループと東山動物園を訪れた2つのグループが共同で発表を行い、「動物たちを動物園やショーなどで見世物にすることについてどう考えるか」というテーマで討論を行った。

このグループはすべての段階において準備が早く、フィールドワークの質問内容もノートにびっしりと30以上書き込み、まとめのレポートもカラフルにわかりやすくまとめることができた。お礼状にMさんは「カメラにもよろしくお伝えください」と書き添えるなど、疑問点を追求する中で、名古屋港水族館の生き物たちへの愛着をさらに深めていく様子が見えがえた。

フィールドワークの発表では、絵が得意なMさんが中心となって紙芝居を作った。Mさんが下書きなしで書いた絵に他のメンバーが色を塗り、2～3時間で10枚ほどの紙芝居ができた。



紙芝居を使ったフィールドワークの報告

東山動物園のグループは、やはりヘビを首にまいた印象が強かったようで、ヘビの模型を作り、手触りを工夫して再現していた。思ったより、ヘビの肌がじとじとしていなかったことが驚きだったようである。この体験をTさんは、

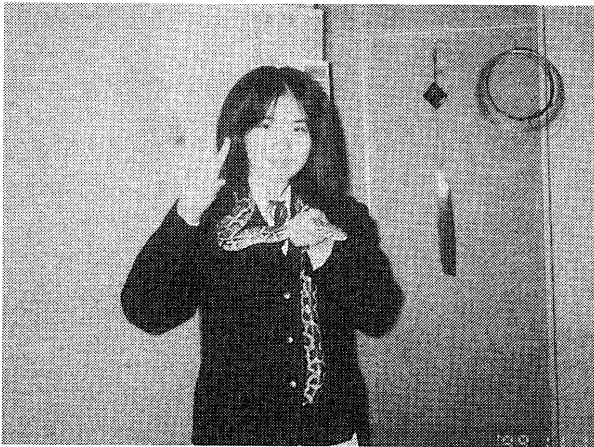
「今まで口では、『ヘビなんてこわくないよ!』と書いていましたが、内心では『こわそう…』『気持ち悪

いなー』などと思っていました。でも、インタビューをした時にヘビに触ってみて、なんかとても不思議なものを感じました。そのヘビから伝わってくる“テレパシー”というか、あのなんとも言えない感触というか…とにかくとても不思議なものでした。その不思議なものを感じた時に『なんだー、ヘビって案外こわくないじゃん!!』と思いました。』と表現している。

Tさんは、この経験をさらに、次のように広げている。

「これに似たことは日常生活でもよくあると思います。例えば、人や物事に対して、外観などで決めつけてしまう。それはいけないことだと自分ではわかっているが、ついつい決めつけてしまう時があります。もしかしたら、そのヘビさんは、私に『それはいけないことだよ!』と教えてくれようとしたのかも知れません。とにかく、私はそのヘビさんと触れ合ったことによって、自分のまわりのことなどについて、もう一度見つめ直すことができました。」

これは、「この仕事をして良かったこと、嬉しかったことは何ですか?」というTさんたちの質問に対して、「ヘビの誤解が解けて、かわいいと言ってもらえたとき」と答えてくださった、ヘビに対して深い愛情をもっている東山動物園の爬虫類飼育係りの方に直接手渡されたヘビであったからこそ、ここまで、深くとらえることができたのであろう。



東山動物園にてフィールドワーク

討論会では、「動物を見世物にするのはかわいそうだからやめた方がよい」という意見に対して、「種の保存に必要だ」「動物を見ることによって、動物に対する理解が生まれるからある程度は仕方ない」という意見がでた。「動物園はいいけれど、ショーはやめた方がよい」という意見がでるなど、話し合いやすいテーマであったので、第一回目の討論会で司会が不慣れであったにもかかわらず、次々と意見が出た。

② 3-c グループ

発表 表：「法に携わる人々」

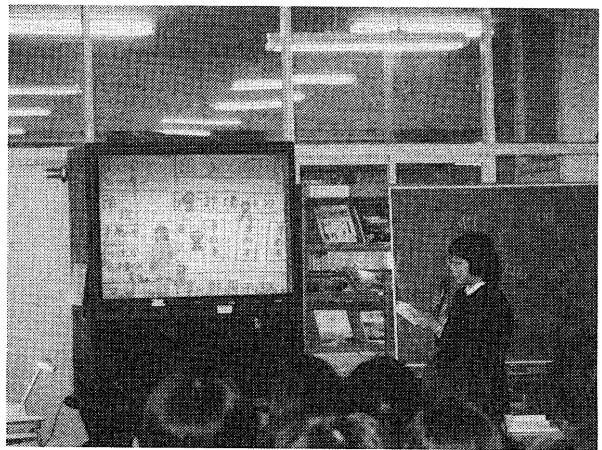
討論テーマ：「少年法は必要か」

このグループには、愛知県警察本部へフィールドワークに行った4人と本校の卒業生である弁護士さんに聞きにいった1人がいる。

愛知警察本部組はテレビドラマの“踊る大捜査線”の曲をバックに寸劇で発表を行った。図書館の片隅で大笑いをしながらせりふを考えていた。図書館を閉めようとしてもなかなか帰らず楽しんでいたので、進んでいるものと思っていたが、リハーサルをしてみたら、内容は浅く、何を発表したいのかわからない状態であった。そこで、発表したい内容をリストアップし直してポイントを絞るようにアドバイスした。

文化祭の演劇コンクールでクラスを準優勝に導いたH.Sさんがリーダーとなり、せりふや動作、音響を監督して指示を出した。その要求水準に刑事役のY君がついていけないのを見て、Fさんが直前に交代した。刑事さんが男性であったために、グループ内唯一の男子のY君に役が回っていたのだが、本来はFさんは自分がやりたかったので、“私がやっていいならやりたい”と勢いよく言い、積極的に取り組んだ。

今年の中学1年生は発表に慣れた生徒が多いため、単に原稿を読むだけでなく、このように発表を工夫する段階までできるグループが多かった。



実物投影器を使って紙芝居を見せながらの発表

討論テーマは次のFさんの提案である。次のように刑事さんにインタビューした内容から問題意識をもった。

「『犯罪者というのは何才ぐらいが多いのですか。』と質問した。私は20才ぐらいとか30才ぐらいとかの年齢を予想していた。ところが、Kさんは、「14才から犯罪というんですけど、犯罪者の50%以上が未成年者なんですよ。」と、思いがけないことを答えた。私はとてもおどろいた。犯罪の内容は、万引き、シンナー、け

んかななどが多いようだ。これは本当にショックだった。そして、少年事件について考えてみようと思った。そのために、まず少年法について調べることにした。」
(Fさん)

はじめに、少年法についてFさんとH. Sさんが説明した後、3人のパネリストがそれぞれの意見を発表した。パネリスト3人の立場はそれぞれ以下の通りである。

Fさん：

「少年法は必要ない。少年院に何年かいるだけでは少年は改善されない。きびしく罰せられないことを知って犯罪を犯す少年がいる。少年もきびしく罰すれば、少年犯罪は起こりにくくなる。」

H. Sさん：

「少年法は必要だ。どんな少年も変われる。厳罰をしても仕方がない。犯罪を犯す少年は親から虐待を受けるなど人間関係がうまくつけれないケースが多いので、牢屋に入れておいても改善されない。むしろ、少年たちの受け入れ先となる協力雇用主を制度化するなど立ち直るシステムを充実すべきだ。」

Iさん：

「少年法は必要だが、改正が必要である。顔写真は出さなくとも名前を公表すべきである。神戸事件では、被害者より加害者の方が人権が守られている。せめて、被害者だけでも裁判を公開すべきである。」

パネリストの意見発表の後、生徒から多くの意見が出された。「痛い目に会わないとわからないから、少年もおとなと同じように罰するべきである。」「少年法があると、人を殺しても何年か少年院に入っていて出てくる。これでは被害者が納得できない。」といった意見に対して、「罰は被害者のためにあるのではない。本人の反省のためにあるのだ。」という意見が出たり、「罰を重くすると、その少年はやり直しがききにくくなくても、次の犯罪が防げる。」など、さまざまな角度からの意見が出た。

少年院に対しても、「少年院に入ってもすぐ出てきては罰が軽すぎる。」という意見に対して、「自由を奪われる生活はたいへんだから、充分罰になる。」という反論がでた。さらに、これに対して、「お兄さんの友達で、少年院に入っていて出たきた人がいたけれど、ちっともよくなっていなかったから、少年院は意味がない。」と身近な例を紹介する生徒もいて、活発な意見交換の場となった。

討論会の最後に“少年法は必要”か“少年法は要らない”のどちらの意見か参観者も含めて手を挙げて

らったところ、参観者はほとんどが必要と答えたのに比べて、生徒の中にはかなり“少年法は要らない”と答えた生徒が多かった。

パネリスト、司会者だけでなく、フロアの生徒も、事前のプリントや当日の説明によって、少年法の基本理念や内容を把握している生徒が多く、その基本知識を基盤とした討論ができた。

パネリストのFさんは、集録に次のように少年法のみでなく“法”について視野を広げ、次のように書いている。

「少年法は“少年は、まだ立ち直る可能性があるから、厳しい罰はあたえないべきだ”というようなものがほしいの趣旨だ。これは正しいと思う。しかし淳くん(神戸の事件の被害者)のお父さんはこう言っている。「…加害者の少年は保護されている…」またこれも、正しいことだ。法というのは、見る人の立場によって、意見が180度分かれるものなんだな、と思った。」

司会者のY君は最後の集録に次のように書いている。

「一番楽しかったのは発表の準備であった。何回も居残り発表の準備をしたり、討論会の準備だった。あと、発表も緊張したが、おもしろかった。」

公開授業の発表にあたったグループは他のグループより、授業後に残る回数が多かったのであるが、嫌がることがなかった。自分たちのグループの決めた討論テーマが他の生徒の投票で多数を得たことが自信になっていた部分もあるかも知れない。「自分たちだけ残されて」と不満を言う生徒がいるかと思っただけ、まったく不満は出ず、「私たちだけ手厚く先生たちが手を入れてくれるから、他の子がうらやんでいる。」と言っていた。「何で私たちが200人の前で発表しないといけないの」というとらえ方ではなく、“当たってよかった”ととらえていたのが印象的であった。

討論会の予行演習も教員の方が切り上げようとしても、「おもしろいからもっとやろう」と言って帰らないのである。そして、自分たちで、「他に出そうな反論はない?」とお互いに聞いて下校時刻まで練習していた。「討論っておもしろいね。はまった。」と言っている生徒もいた。

H. Sさんは

「みんなに“よかったよ!”などと言われて、今まで大変だったけどがんばってよかったと思いました。」

E. Sさんは

「発表はすごく緊張しました。でも、成功したのでよかったです。発表の後、みんなに“おもしろかったよ”と言われてすごくうれしかったです。」と書いているように、友人からの誉め言葉が自分たちの充実感や自信につながっていった。

公開授業のときには、愛知県警のKさんを招待しており、見に来ていただける予定であったのだが、直前に起きた名東区での殺人事件のために、来られなくなってしまうため、E.Sさんは、「発表するとき、Kさんが来られなかったことが少し、残念でした。やっぱり警察という仕事はすごいそがしく大変だということが身にしみました。」と書いている。

Fさんは次のように、自分たちの努力に対して、応えてくれたフロアーに対する感謝の気持ちを表現している。

「グループの人数が少ないので何でも話し合え、けっこう良い発表ができたと思う。笑ってほしいところでは笑って、まじめに聞いてほしいところではまじめに聞いてくれたフロアーの方々にも感謝しています。討論会でたくさんの意見が出て、自分の考えを深めることができた。」

Fさんのみでなく、多くの生徒が、フィールドワークに行っただけでなく、発表の準備をして、討論会のために、自分の考えをまとめる過程で、考えが深まり、広がっていった。

② 4-a グループ

発表 表：「人の考え方と接し方」

討論テーマ：「早くからの学習と習い事の是非」

教育研究機関という分け方をしたので、このグループのフィールドワーク先は、幼稚園、小学校、大学と訪問先が多様だった。その為、発表の準備段階で共通する発表テーマを設定するのに苦労していた。しかし、その分、お互いの発表内容を生徒同士が発表の準備段階から共有することができた。つまり、発表の内容を計画し、内容を選び、組み立てる過程で、お互いの調査内容に耳をよく傾けていた。結局グループ発表は、いじめの実態と原因をペープサートを用いて発表したり、協調性の問題を社会心理学の観点から説明したり、今の幼稚園児、小学生の現状をインタビューの再現という形で発表することになった。

このような研究協議会での発表の準備は「前略…レポートのまとめは時間がかかるし準備は忙しいし家まで仕事を持ち込まないと出来ないし。」(Sさん)と生徒の感想にあるように時間と労力を要する活動のようだった。また、このグループのまとめ役であったSさんの「セリフから小道具作り、発表まで自分で全部やらなければいけないのでとても大変でした。特に、小学校グループはそれぞれ行った所が違ったので4人の意見をまとめることがなかなかできず、何度も案を練り直したので時間がかかりました。でも苦労した分良い発表ができたんじゃないかなと思います。」という発表準備に関する感想は、準備段階でのこのグループの

学習の様子と苦労を物語っている。

研究協議会当日、発表者にはかなりの緊張感があり、自分たちの発表内容を効果的に伝えることの難しさ、と同時にやりがいを感じていた。多くの参観者を迎えるなかでの発表のプレッシャーをプラスへと転化していた。「自分たちで考えて発表することはとてもむずかしくて大変なことだと思いました。」(Tくん)や「2年に一度という研究協議会の中で、この年にあたってよかったです。」(Sさん)「たくさんの人の前で発表したり討論するのはかなり緊張したけれど、楽しくて、とてもいい思いでになったし、貴重な体験をしたと思う。」などの感想からそのプラスのエネルギーを感じることができる。

もう一つの準備として苦労したのが討論テーマの設定である。話題が教育問題だけにそれぞれの生徒に討論したいテーマがあり、体験に根ざした話題も数多くある為に、賛否両論がありかつ深い討論テーマを一つに設定するのに時間がかかった。結局、討論テーマは「早い時期からの学習と習い事の是非」となった。このテーマにした理由は、このグループの多くの生徒が習い事や中学受験の準備の経験があり、その経験に根ざした自らの意見や考えをしっかりと持っているからであった。さらに、早い時期からの学習と習い事に対して有意義な意見と疑問を同時に持ち合わせていたからでもあった。また、教師志望の生徒もいたのでこれからの将来の展望にも関わりがあり、討論を自分の問題として引き付けて考えることができると判断したからでもあった。「討論会のパネリストとしてみんなに自分の意見を主張するのは初めてで少し不安だったけど、前から興味があった早期教育について意見を言うことができおもしろかった。」(Sさん)や「二度目になりますが僕の夢は教師です。そして、その教師に必要なのは人間としての器の大きさだと思います。なぜなら、器が大きければその分生徒達を受け止められるからです。だから僕は、器の大きい人間になろうと思いました。」(M君)の感想が、上に述べた討論テーマの設定理由を裏付けるものとして挙げるができる。

研究協議会での討論は、5人のパネリストが 1) 早期の学習を反対する立場 2) 早期の学習には反対するが、後で役に立つ習い事には賛成する立場 3) 役に立つ習い事には賛成する立場 4) 早期の学習にも、後で役に立つ習い事にも賛成する立場 5) 早期の学習にも、後で役に立つ習い事にも反対するの立場からそれぞれ意見を述べた。具体的に、それぞれのパネリストの発表内容を以下にまとめてみた。

「わたしは受験の為に早期教育に反対です。理由は幼稚園受験をするために、小さいうちから英才塾に入れ

てしまい、遊ぶ時間が減ってしまうからです。幼稚園受験や小学校受験では、子どもには十分な判断力がなく親の意思や意見に従うしかないと思うからです。それに小さいうちは、勉強からの収穫より遊びからの収穫の方が、人と接する人間社会で役立つと思います。また、ガリ勉くんは、人間関係が狭く、話題が限られていて、自己中心的な人が多く、団体の中でも孤立している人が多いと思うからです。」(Y君)

「わたしは早期の学習には反対です。学校で色々な事は教えてもらえるし、分からない事があれば先生や友達にきけば教えてもらえるので、授業がわからないから塾へ行くという必要もないと思うからです。それに何より、型にはまった勉強をするより自分にあったやり方を見つけ効率のよい勉強をした方がいいと思うからです。一方で習い事はやった方が良くと思います。体で覚えたことは大人になっても覚えていると思うし、スポーツ選手などでも小さい頃からやっていたのでうまくなったという人が多いからです。わたし自身も、幼稚園のころに体操教室に行ったことにより苦手だった運動が少し得意になった経験があるからです。だから、習い事は役に立つので賛成です。」(Sさん)

「早期の学習は基本的に反対です。その理由は、わたしが小学校の頃、塾に行って中学校受験した友達は受験に関係のある勉強はできたけれど、音楽や美術などは自分に必要ないと言ってまじめにとりくまなかったし、友達との関係も悪くなったことがあったからです。受験を目標とした学習によって、友達関係、受験とは関係のない授業をおろそかにしたり、くつろぎの時間を持てなくなったりして良くないと思うからです。受験勉強以外の事もしっかりやる自信があるというのなら、塾に行くのは自分の問題だからよいと思うけど、受験勉強だけがすべてではないことを忘れて欲しいと思います。また、自分で勉強をする方が自主性が身につくと思います。」

早期の習い事は本人しだいで賛成です。その理由は、わたしは小さい頃からスイミングを習っていたので、今ちゃんと泳げるようになりとても役に立ったからです。親の理想だけでふりまわし無理にやらせるのはよくないと思いますが、本人の意思を大切に習い事をするのは良いと思います。」(M. Sさん)

「わたしは早期の学習にも習い事にも賛成です。理由は、わたしは小学校の時に塾に行っていたので学校での授業がよく分かり受験の時にも役立ち、またスイミングやピアノをやっていたので授業で役にたったからです。それに、これらのことを自分の意志で始め、自

分の意志で辞めたため、親に無理やりやらされるという苦痛がなく楽しんでやることができたからです。早期学習で、塾に行っていた時に得た知識のおかげで他の友達に教えたり、習字をしていたおかげできれいな字で手紙を書けるなど、将来的にも役立つと思うので早期学習をすることは良いことだと思うからです。」(Kさん)

「わたしは早期の学習にも習い事にも反対です。なぜなら、幼稚園の時あまり勉強しすぎると、小学校に入ってから勉強がつまらなくなるからです。小学校のころ塾に行っていたけど、塾で先の事をやってしまうので、学校で復習するような感じで何か学校に行くのが嫌になったからです。また、習い事についても、わたしはスイミングをやっていたのですが、無理をして一度気分がとても悪くなった経験があり、その時まだ泳げなかったらもう続けることが嫌になっていたと思うし、結果として泳げなくなっていたかもしれないと思うので、早い時期から無理すると、マイナスになることがあるかもしれないからです。」(M君)

この後で、発表内容についての質問をフロアーから受け、早期教育の是非についてフロアーから発言を求め、参観者にも意見を求めた。討論はいつものように活発であった。時間が充分とれない中で、自分の経験をもとにした具体的な意見交換ができたように思う。

例えば、パネリストの発言を受けてフロアーから、「本人の意思や気持ちをはっきりして、親にそれを伝えるなら習い事は役に立つことが多いので、よいのではないか。」という意見が出された。

それに対して、「発言力の強い母親に自分の意見や考えを言っても無駄な抵抗だと思う。言われるままです。」と自分のエピソードを淡々と語る生徒に会場から笑いがおこった。

「本人の意見や気持ちといっても、小さいころにははっきりと自分の意見を持ってない内容や時もあるし、そのような場合は親の決定権が大きく、そうすると本人の意思が大切にされているとは言えないと思う。」と現実的な意見が次々と出された。

また、「早い時期からの学習で塾に行くことに反対の意見が多いが、塾も友達同士のコミュニケーションの場として役立っている。」といった意見も出された。

多くの生徒が、討論の難しさを感じながらも、新鮮で刺激的な面白さを体験できた。また、自分の視野の広がりを経験し、同時に他者理解へとつながっていった。一年間を振り返って最も印象に残っていることの感想として「今まであんな大人数での討論なんてした

ことなかったし、なんと言いますか、自分の意見に反対する意見とか出てくると、それに対する自分の意見をまた言わせてもらえるかもしれないので瞬間的に何通りもの答えを用意する。頭を常にフル回転させている感じがして、とても刺激的で楽しい経験でした。またやりたい。」(Aさん)とあった。また、討論に積極的に参加しなかった生徒の中に、「例えば、自分と相手の意見がくいちがった時に自分の意思をきちんと伝え、相手を認める力が必要になる。そして、認め合うことができたならそのグループ自体も成長するし、人間的にも成長できる。」(W君)という感想を表していた。

発表・討論会の最後に名古屋大学教育学部新海英行先生よりコメントをいただいた。

『「親の背を見て子は育つ」ということを大切に思っています。ここではその言葉の意味を広げて『第一線で活躍する大人達の背中を見て育つ』という機会になっていると思います。大人から学んだことをここに持ち込みみんなのものとして共有することは大切なことです。』

総合人間科はあらためて教科を超えた学習であると思いました。調査する力、聞き取る力、発言する力が必要で、社会でも、理科でも、国語でもあり、いろいろな力を育てる大切な場であると思います。」

新海先生には研究協議会以前に授業案を見ていただき、また別のグループの発表・討論会を見ていただいてアドバイスをいただいた。



新海英行先生よりコメントをいただいているところ

(6) 研究集録

フィールドワークでインタビューした内容もまとめられるとよかったのであるが、時間が足りないために、簡単な一年間の活動の歩みのまとめと、「総合人間科を通して考えたこと」という作文を集録とした。内容的には、それぞれの考え方や感じたことがよく表れていておもしろい内容であるので、1年生の間に読んで

それをもとにまた話し合いができるとよかったのであるが、3月20日までに印刷できず、2年生になってからの配布になってしまった。

IV. 1年の取り組みを顧みて

(1) 発表会と討論会

今年度初めての取り組みとして発表会を5~10人のグループごとに行い、討論会を組み入れた。発表をグループごとに行うことにより、40箇所を越すフィールドワークの発表の繰り返しを減らすことができたが、クラスにこだわらないグループわけにしたため、80人での発表会と討論会となった。このため、グループによっては、集中できずに私語が多くなる場面もあった。

しかし、グループごとに、どのように自分たちのフィールドワークで得た知識を結びつけるかを考える中で、自分のフィールドワーク先と友人のフィールドワーク先との関連を認識することができた。自分の興味・関心のある人へのインタビューのみでは、ともすると自分の体験のみで終わってしまうが、発表を考える過程で、お互いに学びあう場をもつことができた。

グループによっては、グループ内の関連がうすく、グループごとに決めた討論テーマと自分のフィールドワークでの体験が結びつきにくい生徒もいた。それでも、ほとんどの討論で、意見が次々出て、1つのグループの発表と討論が1時間で終わらなかった。

10回の討論会を通して、Tさんは、次のように関連づけて考えた。

「このテーマに限らず、ほとんどのテーマに言えることだと思うけれど、どのテーマも“ヒトV.S自然”という感じがしました。例えば、薬の開発でマウスを使って実験するのはかわいそうと思うが、でも薬を開発しないとヒトが死んでしまうかも知れない。そうすると“しかたなく実験するしかない”ということになる。こうしてみると、『人間って何をやっているのだろうか?』『こんなことをしていて本当に正しいのかな?』と疑問をもつようになりました。この疑問については、人それぞれの考え方がちがうから、はっきりと“正しい!”“とか”正しくない!“とか言えるわけではないから、この疑問について総合人間科を通してこれから考えていきたいと思います。」(Tさん)

また、毎回よく発言したOさんは、討論会に対して討論の内容のみでなく討論会の意味を考え、さらに自分の生き方にまで考えを深めていき次のように表現している。

「討論会では、たった1つの事に対しても、人によっ

て、それについての考え方が異なっている。考え方が異なってもその複数の意見がすべて間違いでない場合がある。だから、自分の考え方を優先し、相手の考えを真っ向から否定するには問題があるのだろう。複数の人の意見が重なるにつれて、そのたった1つの問題は、いろいろな観点から見られるようになってくる。これらの事を当たり前のことだと考えてしまえばそれで終わりだが、その“当たり前”というものが、大切だと私は思った。(中略)“当たり前、当たり前”と思って何もせずにいるという事は、いろいろな可能性を自分で駄目にしてしているという事なのだな、だから自ら行動するという事は大切な事だというのが、私の総合人間科を通して考えた結果である。」(Oさん)

(2) 総合人間科による生徒の考え方の変化

中1の総合人間科には、Iで述べたように、「人と豊かな学び合い」の足場づくりをして「生き方を探る」基盤をつくり、6年間で「自分の人生を自覚的に選択していく力を育てる」という大きな願いが込められている。生徒たちは、個人差はあるものの1年間の活動に意欲的に取り組み、その中で、多くのことを考え、感じる事ができた。研究集録の「総合人間科を通して考えたこと」という題で書いた文章も自分なりの考えや表現が見られる生徒が多かった。

フィールドワークの交渉、実行、お礼状書き、レポート作成、発表、討論会、研究集録の原稿作成など、どれも多大なエネルギーが必要な活動であるが、それを楽しみながら取り組んでいける学年であった。その様子をM君は次のように表現している。

「なにはともあれ一年間総合人間科をやってみて、行きたいところにも行けたし、前から気になっていたこともわかったし、その人たちそれぞれの考えもわかったし、なにより一年間やってみて、何度も書くけど楽しかった〜。」

まだ直接“生き方を探る”につながっていない生徒もいるが、“人から学ぶ”ことによって、自分の生き方を考え直すきっかけになった生徒が多かった。例えば、次のA君は、フィールドワークで聞いた宇宙に関する疑問がわかったことだけでなく、自分の職業に誇りをもっている人から直接話を聞くことができたことが自分の生き方を考えるきっかけとなった。

「奥地さんは自分の意志でこの職業を選んだらしいので、今は満足しているらしい。やっぱり自分の好きなことをして生きていきたい。この生き方がいい、あの生き方がいいなんてことじゃなく、自分にあった生き方をしていきたい。」(A君)

さらには、次のMさんのように、直接的に自分の生

き方に対する考え方が変化した生徒もいた。

「私はこのごろ獣医という夢をあきらめようと思いはじめていました。なぜなら、今の私の学力では、とうていむりな夢と思えてきたからです。しかし、その気持ちを消してくださったのが、興味・関心のある人へのインタビューでインタビューさせていただいた大野さんでした。(中略)私は、“好きでなりたくて”という言葉が頭からはなれませんでした。そして、自分だって、好きでなりたくて夢にしているのだから、大野さんのように“あきらめることなんて、やめよう”と思うことができました。」(Mさん)

次のKさんのように、校外に出て、自分の興味・関心のある職業の人に直接話を聞くことは、学校という狭い毎日の活動場所と社会との橋渡しとなった。そして、その広がり、自分自身の将来という、時間的な広がりにもつながっていった。

「今年1年の総合人間科を通して、今しか考えていなかった私が、将来のことを考えられるようになりました。」(Kさん)

また、次のH君のように、将来への視野を広げたところから、日常生活を見直すことにより、毎日の学習への取り組みに対する意欲が変化した生徒もいた。

「先生がおっしゃるには、今の時期は、一番たくさんのが覚えられる時期なので、語学も、学校の勉強がんばって、将来入りたい大学へ入って、考古学をやってくださいとのことです。まずは、中学の基礎となる国、英、社の文科系をカンペキにしないといけないため、(うっっどうしよう、分からん所がたくさんある。)マジメに勉強をしよう!。」(H君)

また、次のUさんやAさんのように、“自分”を見つめ直すことにつながっていった生徒も多かった。

「私は総合人間科を通して、今まで全然考えたこともなかった“一人の存在”について考えました。今まで私は、人が何人いなくなるとこの世界は何も変わりなく続いていくと思っていました。でも、この総合人間科のおかげで1人がいなくなるだけたくさんの人たちが悲しみ、困り、そしてその1人がいるという当たり前のことでたくさんの人たちが安心することができる、と思ひ直すことができました。(中略)私はその1人の人間関係の輪が広がれば広いほど、その1人がいなくなれば悲しむ人、困る人が多いと思います。(中略)“1人の存在”はとても大きなもので、その1人はなくてはならない存在です。これからは私ももっと自分を大切に生きていきたいです。」(Uさん)

「個性を認め合うこと”人は一人では生きていけ

ないこと”“自分に自信をもって生きること” 1年を通して、この3つの言葉を教えられました。私は、この3つの言葉を決して忘れません。そして、この言葉とともに、“自分らしい生き方をしていこう”と思いました。」(Aさん)

一年間の総合人間科を通して、“人から学ぶ”ことの大切さを感じ取り、社会の中での自分を見つめ直し、自分の生き方を問い直し、自分の存在に自信をもち、そのことにより自分を大切に育て、“自分の人生を自覚的に選択していく力”を伸ばしていってくれることを願っている。

資料

中学校 1年 総合人間科学学習指導案

指導者氏名 米田潤一 石川久美 藤田高弘
大口悦子 飯島幸久 杉本雅子

1 日時・場所 2000年2月22日(火) 10:40~12:20 図書館

2 研究主題と題目 生き方を探る一人との豊かな学び合いから考えよう

3 題目設定の目標

本校の総合人間科の目標は「自分の人生を自覚的に選択していく力を育てる」ことである。その第一歩として中学1年生では、新たに出会ったクラスの友人、その保護者へのインタビューを通して身近な人間関係を考え、豊かな学び合いの基盤作りを行うことを目標にしている。さらに、生徒の興味・関心のある訪問先でのフィールドワークを通して、社会の中の自分の生き方を考え、探る基盤となることを目標にしている。

4 指導過程

一学期 a) 総合人間科の紹介・友人へのインタビュー b) 友人の紹介 c) 身近な人々へのフィールドワーク
↓
二学期 a) 興味・関心のある訪問先の交渉 b) フィールドワーク・フィールドワークの報告書の作成
↓
三学期 a) 各グループごとに共通発表テーマと、共通討論テーマの設定 b) 各グループの発表と討論

5 本時の授業

(1) 目標

- a) フィールドワークで調べた内容を創意工夫して発表する。その発表を通して調べた内容を整理し深める。
- b) フィールドワークで持った問題意識を、討論を通してよく考え深める。

(2) 授業形態

フィールドワークで調べた内容に基づいて、発表と討論という授業形態をとる。フィールドワークで調べた内容に基づいて、各グループごとに共通する発表テーマを設定し創意工夫して発表する。さらに、グループごとに共通の討論テーマを設定し、パネリストがそれぞれの観点から問題を提起し、その後フロアーとパネリスト全体でその発表を基に討論をする。

授業計画

発表テーマ・討論の流れ	時間	発表形式・役割の内容と留意点
発表テーマ1:「法に携わる人々」 発表(1):弁護士の仕事内容 発表(2):刑事さんの仕事内容	5分 8分	クイズ形式で説明 劇とビデオ
討論テーマ1:「少年法は必要か」 1) 討論の目的、テーマ、討論の進め方の説明、パネリストの紹介 2) パネリスト(1):少年法の基本的精神と内容を説明し、神戸の事件を例に出し厳罰主義の立場から意見を述べる。 3) パネリスト(2):神戸の事件の具体的説明と、現在の状況を話し、被害者の親の投稿文を紹介して少年法に対する自分の意見を述べる。 4) パネリスト(3):少年法の改良という観点から、具体的な改良点を説明し、自分の意見を述べる。 5) 司会者が3人の論点をまとめてから討論 a) 発表内容についての質問をフロアーから受ける b) 少年法の必要性、改良点についてフロアーに発言してもらう。 c) 参観者にも、時間があれば意見を求める。	2分 5分 5分 5分 20分	1)パネリストは筋道立て、わかりやすく、報告する。与えられた時間を守り、他のパネリストの報告もよく聞き、後で関連したことを話せるようにする。また、フロアーからの質問に答えたり、討論の際にはよく相手の話をよく聞く。 2)司会は、発言者の意見をまとめたり、議論の要旨をまとめたりする。また、討論の最後にはテーマにもどって結論を指し示す。
発表テーマ2:「人の考え方と接し方」 発表(1):いじめの実態と原因を行動心理学の観点から発表する。 発表(2):協調性の問題を社会心理学の観点から発表する。 発表(3):今の幼稚園児、小学生の現状を具体的に発表する。	5分 3分 5分	ペープサート 紙芝居 紙芝居等
討論テーマ2:「早い時期からの学習と習い事の是非」 1) 討論の目的、テーマ、討論の進め方の説明、パネリストの紹介 2) パネリスト(1):早期の学習を反対する立場から意見を述べる。 3) パネリスト(2):早期の学習には反対するが、後で役に立つ習い事には賛成する立場から意見を述べる。 4) パネリスト(3):役に立つ習い事には賛成する立場から意見を述べる。 5) パネリスト(4):早期の学習にも、後で役に立つ習い事にも賛成する立場から意見を述べる。 6) パネリスト(5):早期の学習にも、後で役に立つ習い事にも反対する立場から意見を述べる。 7) 司会者が5人の論点をまとめてから討論 a) 発表内容についての質問をフロアーから受ける b) 早期教育の是非についてフロアーに発言してもらう。 c) 参観者にも、時間があれば意見を求める。	2分 3分 3分 3分 3分 3分 20分	3)フロアー(聴衆)は、討論の際には主役となる。発言者の意見をよく聞き分析して、議論を深め、課題を明らかにするように発言する。発言の際には客観的に、品格を持って活気ある討論をする。
8) 指導助言者(教育学部新海英行先生)からの総括とコメント		

6 ご高評